

ある むぜお

府中市郷土の森博物館だより

al museo

2023年12月20日

No.146



武蔵野公園遺跡でみつかった縄文時代の土器
(江戸東京たてもの園所蔵・提供)

もくじ

- 1-2 [どんなもんだい？ 縄文時代](#)
[その3…市内初の縄文遺跡調査](#)
- 3 [最近の発掘調査](#)
[江戸時代府中宿の鋳物工房跡](#)
- 4-5 NOTE
[「府中町考古館」](#)
- 6 [展示会案内](#)
[企画展 小学校でちょっとむかしのくらし](#)
- 7 series [みち～道・路・通～](#)
[③鉄道の開通とみち](#)
- 8 [近代プラネタリウム誕生 100周年！](#)
[プラネタリウムについて知ろう！](#)
[③どこで見る？プラネタリウムの座席](#)

どんなもんだい？ 縄文時代

じょうもん
縄文時代は、今からおよそ 16,000 年前～ 2,300 年前。調査・研究で明らかになっている当時のくらしとは、いかなるものでしょうか。そして、そこからどのような時代像が描けるのでしょうか。府中市内でみつかった資料を入口に、その調査・研究の一端を 4 回シリーズでご紹介します。

その3…市内初の縄文遺跡調査

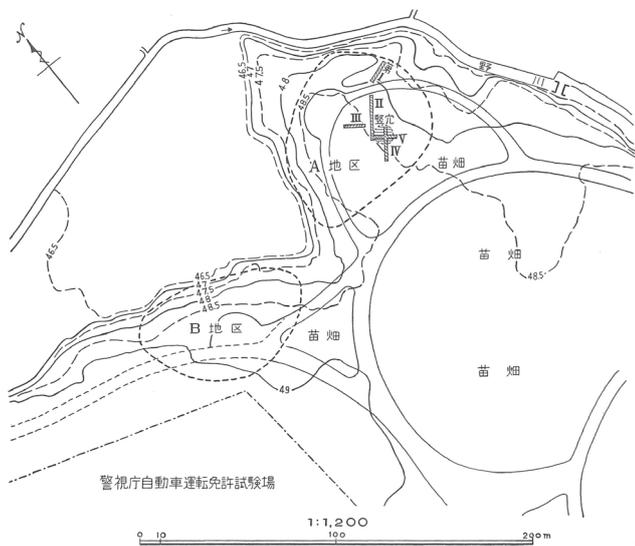
のかわ野川沿いに位置する むさしの武蔵野公園遺跡（府中市 たまちよう多磨町）。ここで 1964 年（昭和 39）に実施された発掘調査が、市内で初めての縄文時代遺跡の調査となりました。上の写真は、その時見つかった土器です。一辺約 30cm、高さは約 23cm で、ずっしりとした重みがあります。ふち縁部分の そうしよく装飾がこまかい、縄文時代後期の土器です。

どんなもんだい？ 縄文時代

その3…市内初の縄文遺跡調査

武蔵野公園遺跡は、その名のとおり都立武蔵野公園内、野川の右岸にあります。府中市の北東端にあたる場所です。1964年（昭和39）12月20日～25日の6日間、武蔵野郷土館（現・江戸東京たてもの園、小金井市）の吉田格さん指導のもと、東京学芸大学の学生が協力して発掘調査がおこなわれました。調査の2年前には、この辺りで土器が見つかるという情報を地元の人から得ていたといいます。吉田さんは昭和30年代以降、武蔵野地域の遺跡調査に注力した人物のひとりで、この調査もそのひとつであるとともに、府中市史の編纂事業の一環として位置づけられました。

調査によって、縄文時代の竪穴建物跡や斧・鏃といった石器、土器などが発見されました。これらは、縄文時代のなかでも後期とよばれる時期（およそ4,000年以上前）に使われたものが主です。記録によれば、土器のかけらは全部で4,115点で、形が復元できた土器はすべて竪穴建物跡の内部から見つかったといいます。右上の写真もそのうちの1点で、注口土器とよばれる後期の土器です（注ぎ口、片側の把手は復元）。調



武蔵野公園遺跡地図 A地区が1964年調査エリア
（『府中市史史料集 第十集』より）



注ぎ口のある土器（江戸東京たてもの園所蔵・提供）

査報告の表現を借りると、胴部はそろばん玉のように中央が突出した形をしています。この最も張り出している部分で直径約20cm、土器全体の高さは約13cmあります。

府中市の北側を流れる野川の周辺では、旧石器時代以来の遺跡が多く見つかっています。野川に沿うように国分寺崖線（武蔵野段丘と立川段丘の境）がのび、湧水が豊富なことが大きな要因として挙げられます。現在でも、国分寺市や小金井市には湧水の名所があります。流域という括りでとらえると、武蔵野公園遺跡も野川沿いの恵を求めた人びとの足跡といえるでしょう。

今夏に開催した特別展では、ここでご紹介した土器2点を展示しました。常設展示している早期や中期の土器とは異なる雰囲気を持つこともあり、「府中でこんな土器が見つかったんですね」という驚きの感想も寄せられました。いつかまた、展示会などで皆さんにご覧いただきたいと考えています。
（石澤茉衣子）



1964年の調査地の現況（北から南をのぞむ）

江戸時代府中宿の

鋳物工房跡

宮西町二丁目 府中市ふるさと文化財課 野田 憲一郎



甌炉の破片が廃棄された土坑

今年8月に府中市役所の新庁舎（おもや）が開庁しましたが、建設地の発掘調査では、江戸時代の府中宿に関連した夥しい数の遺構が見つっています。その中に、発掘調査で発見されることは大変珍しい鋳物工房に関わる遺構や遺物がありました。

発見された遺構は、内面が赤く焼けた円形や長方形の土坑です。土坑には鋳造につかう甌炉の破片が多量に廃棄されていたことから、鋳物の製作に関連した遺構であることがわかりました。

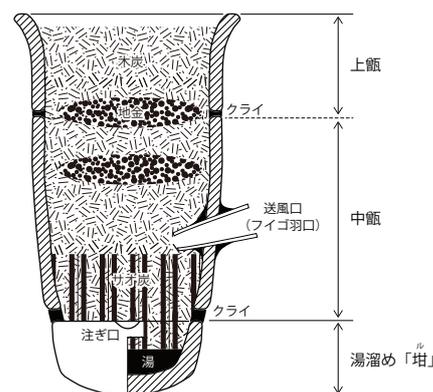
円形土坑の規模は、直径約1m、深さは10～40cmの掘り込みで、底面に十字の溝が掘られている点に特徴があります。用途は明確ではありませんが、内面が焼けていることから、甌炉を据え置いた土坑か、鋳型自体を焼くための焼成土坑だったのではないかと考えています。

出土した甌炉の破片を観察すると、上甌・中甌・湯溜めからなる三段構造の甌炉と考えられ、溶かした鉄（湯と呼びます）を受け取る湯溜め（坩と呼びます）の破片が最も多いことがわかりました。坩は、口径約35cmと約26cmの大小2種が使われていたようです。坩の縁には注ぎ口が付くものもあり、坩から湯を直接鋳型へ流し込んだとみられます。

また、甌炉の破片に混ざって、鍋釜類や鋤先の鋳型があったことから、この鋳物工房の操業は日用品に主力をおいていたことがわかります。甌炉とともに出土した陶器は17世紀初頭のものであり、それ以降の陶磁器が混入しないため、この鋳物工房は江戸時代初期の短期間に操業したものと考えられます。

こうした鋳物製作にかかわる技術者を鋳物師と呼びますが、多摩地域の鋳物師は、江戸幕府の開幕に伴い招集された地方の有力鋳物師集団がそのまま定住し、新興集団を形成したものとされています。多摩地域では、青梅、羽村、八王子、国立で鋳物師の活動が知られています。

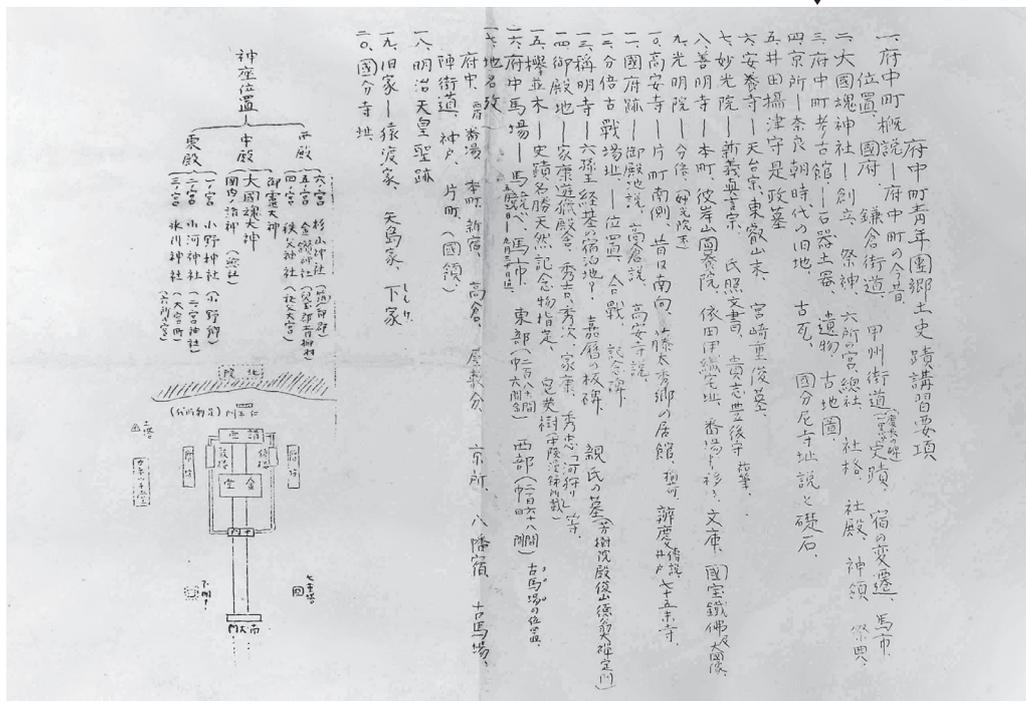
今回の発見で存在が明らかとなった鋳物師は、残念なことに関係する記録が残っていませんが、江戸時代初期の府中宿における鋳物師の活動を知ることができたことは、大きな成果といえます。



甌炉の構造模式図



大小2種の坩



「府中町青年団郷土史蹟講習要項」(府中町青年団関係資料)

▼「府中町考古館」の発見

上の写真は「府中町青年団郷土史蹟講習要項」という資料です。府中町青年団向けの町内および近辺の名所・旧跡などに関する講習プログラムと考えられます。このなかに記載されているのが「府中町考古館」という名称です。「三. 府中町考古館－石器土器、遺物、古地図」と書かれており(↓部分)、これらを保管・展示していた可能性がある場所だということがうかがえます。

これまで見聞きしたことがない「府中町考古館」という施設名を発見し、さまざま調べてみましたが、直接結びつく情報は得られていません。ここでは、少しでもその正体に近づくため、いくつかの視点から推考したいと思います。

▼いつ作成された資料なのか

『府中市教育史 資料編2』(1999年 府中市教育委員会編)では、この要項の作成年を「昭和六年(1931)カ」と記載しています。しかし、史料中の「十二. 分倍古戦場址」の欄にある「記

念碑」(分倍河原古戦場碑)は1935年(昭和10)に建立されているため、この推定年は誤りといえます。

それでは、いつ作成されたのでしょうか。探る手がかりは「府中町青年団」です。青年団とは地縁的な青年の集団で、府中町では前身の青年会を改称して、1919年(大正8)に青年団が発足しました。戦時下の強制的な団名改称や、戦後の一時休止を経ながら、1954年の市制施行前まで存続しました。つまり、この要項の作成は、戦前と戦後両方の可能性があります。

本資料は、元青年団員の方から寄贈いただいた青年団関係資料6点のうち1点です。これら関係資料を見直すと、1947・49年の年号が明記された競技・競走大会のプログラムや成績表が含まれています。同じ方からまとめて寄贈いただいたことや、資料の状態などをふまえると、要項も同時期に作成されたと考えるのが自然なのです。つまり、終戦～市制施行前の期間のものと推定できます。そして、場所・規模などは不明ながらも、

この頃には「府中町考古館」と呼ばれる施設が存在していたこととなります。

▼ 府中での資料保管のあゆみ

「府中町考古館」の由来を探るために、府中での資料保管をめぐる記録を整理します。

はじめに、府中史談会が1932年に作成した「発掘品保管品台帳」があります。史談会は、大國魂神社の宮司だった猿渡盛厚さんを中心に1922年に発足した郷土史研究団体です。台帳には、土器や瓦などの資料名、発見年月日、発見場所などがリスト形式で書かれています。この台帳の存在により、当時すでに資料が保管・管理されていたことがわかります。

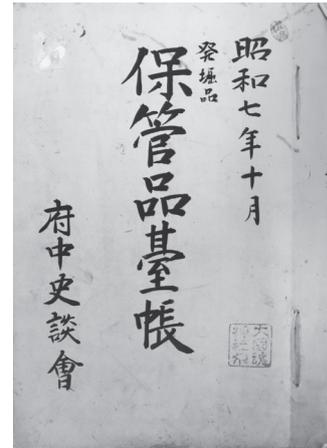
時代は下り1947～48年、考古資料の公開を意図した「武蔵野博物館」の建設計画が持ちあがると、府中町は誘致に手を挙げます（結果、武蔵野市で開館）。この時の回顧録に、府中史談会が出土品を保管していた行在所の一部が博物館候補地として挙げた旨の記述が確認できました。さらに、1961年には、行在所の土蔵解体にともない、史談会が行在所に委託保管していた資料を移動することになったという記録があります。

行在所は、府中町に旧在した建物で、明治天皇の宿泊所になった歴史を持ちます（現在当館に移築・復元されている旧田中家住宅）。遅くとも戦後には確実にここが資料保管場所になっていました。これは建物が町有財産となった1941年以降のことかもしれません。そして、出土品をはじめとした資料は、1932年の史談会の台帳に掲載されているものを含んでいると考えられます。

▼ 「府中町考古館」の位置づけ

ここまで見てくると、「府中町考古館」も、史談会が保管していた資料を公開した施設だった可能性があります。また、行在所が戦後の資料保管場所ならば、「府中町考古館」も行在所内にあった可能性が浮上します。しかし、「郷土史蹟講習要項」にもう一度注目すると、「三・府中町考古館」、「一八・明治天皇聖跡」（行在所を指す）と書き分けられています。もし、行在所が考古館として使われていたのならば、まとめて記載されるのではないかと考えます。

また、教育学者・三井為友さんらがまとめた『府



「発掘品保管品台帳」（府中史談会関係文書）

中町とその教育』に、1949～50年度の府中町の社会教育施設が紹介されていますが、考古館をはじめ資料保管・公開に関わる施設は登場していません。

「府中町考古館」が、資料の保管と公開の機能を兼ねていたのか否か、臨時的な施設だったのかなど、検討すべき点は多く残されています。

もし本当に講習要項が戦後に作成されたならば、若者の学びの場として「府中町考古館」が一役買っていたといえます。また、武蔵野博物館誘致の時期と近いことから、町として気運を高めるために、考古館が設けられた可能性もあります。あるいは、誘致には至らなかったものの、博物館づくりの第一歩としてつくられた可能性もあるかもしれません。

講習要項の作成年が特定できない以上、いずれも推測の域を出ませんが、青年団を含む府中町の歴史のうえに「府中町考古館」を捉える必要があります。

▼ まだまだわからないことばかり…

断片的な情報ながら、昭和初期以降の資料保管の流れを整理し、「府中町考古館」の位置づけを試みました。このほかにも、史談会の関係資料として「出土品陳列館」と書かれた木製看板が残っており、いつどこに掲げられていたのかが注目しています。

やがて府中では、1968年に市立郷土館の開館を迎え、現在の郷土の森博物館へとつながりました。府中での資料保管や公開に努めた先人たちの活動を今後も追いたいと思います。なにか情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、博物館までご一報いただくと幸いです。

企画展 小学校でちょっとむかしのくらし

11/11 (土) ~ 3/3 (日)

会場：旧府中尋常高等小学校校舎 2 階 講堂

この企画展は、いまでは毎日のくらしに欠かせない家電製品が注目を集めた 70 年から 60 年前と、それらが普及した 50 年から 40 年前に使われていたテレビや冷蔵庫、洗濯機、電話などを時代ごとにわけて展示しています。これらの家電製品には、それぞれの歴史がありますが、その中から炊飯器の^{へんせん}変遷についてご紹介します。

いま家庭で使っているようなスイッチを押すだけでご飯が炊ける炊飯器が登場する以前は、カマドに^{はがま}羽釜を^す据え、^{まき}薪をくべてご飯を炊くことが一般的でした。

「はじめちよろちよろ中ぱっぱ、じゅうじゅう吹いたら火をひいて、一握りの^{ひとにぎ}藁^{わら}燃やし、^{あか}赤子泣いてもフタとるな」という言葉をご存知でしょうか。これはカマドでご飯を上手に炊くための^{ひか}火加減と手順をあらわしたものです。はじめは弱火で、中ごろは強火、吹きこぼれたら火を弱め、追い炊きとして藁を入れ、最後は^も蒸らして完成です。

このようにカマドでご飯を炊くには、付きっ切りで火を管理しなければならず、それはおおよそ 1 時間弱かかります。また、火加減や入れる水の量も季節に合わせた調整が必要でした。このようにかつての炊飯は時間がかかり、長年の経験がなければ^{おい}美味しいご飯が炊けなかったのです。

そうした炊飯に関わる火加減を全て機械が調整し、自動でご飯を炊きあげてくれる炊飯器が 1955 (昭和 30) 年に^{とうしほ}東芝から発売されます。この炊飯器を使うことで、炊飯に携わる時間が大幅に減り、水の量さえ間違えなければ、誰でも失敗なくご飯が炊けるようになりました。さらに別売りのタイマーを炊飯器に^{つな}繋げておけば、朝起きたらすでにご飯が炊けているようにもできました。このような炊飯器によって、ご飯を炊くことは大変“楽”になったのです。

当時は炊飯器を使うことに対し、^{なま}怠け者^{もの}呼ばわ



発売初期ころの東芝製自動炊飯器

りする声もありました。しかし、その便利さから炊飯器は発売されると急速に広まり、1965 年には普及率が 50% に達します。一時は全国の農村で炊飯器の実演販売が行われていたようです。

さらに 1960 年には、炊飯機能と 3 ~ 4 時間の保温機能を合わせ持つ炊飯器が三菱電機から発売されます。1972 年には、朝炊いたご飯をそのまま夜まで長時間保温できる炊飯器が象印^{しょうじふし}マホービンから発売され、いまでは私たちの食卓に欠かせない道具の一つになっています。

1955 年ころからはじまる高度経済成長期以降、様々な家電製品が登場し、普及していきます。しかし、便利な道具は数あれど、台所で最も活躍したのは炊飯器なのかもしれません。

この企画展は本館が改修工事のため、園内に移築・復元された、府中第一小学校の校舎でもあった旧府中尋常^{じんじょう}高等小学校校舎の 2 階にある講堂を会場にしています。

ここで紹介した炊飯器などのちょっとむかしの道具のほかに、会場である小学校の雰囲気に合わせて、ちょっとむかしの学校で使われていた道具もとりあげています。ちょっとむかしには当たり前に使われていた道具たちを、どうぞご覧ください。(荒一能)

③ 鉄道の開通とみち

各時代における主要なみちは、時々の政治・経済と密接に結びつき、その盛衰は沿道のまちに大きな影響を及ぼします。古代に武蔵国府が置かれ、近世には甲州街道の宿場町だった府中も、何度かその余波を受けました。今回はそのうちの一つ、1889年（明治22）の甲武鉄道（現 JR 中央線）開通という「荒波」をうけた後の府中のお話です。

甲武鉄道により八王子と新宿が約75分で結ばれると、主要なみちは甲州街道からこの鉄道に移りました。それに伴い、地域経済の中心地は駅が置かれた場所に代わり、長きにわたり交通・物流の拠点だった府中は、その座を国分寺に譲ることになりました。それ以後、府中にとって国分寺と繋がるみちが要路となり、その整備に力を注いでいます。ひとつは馬車や人力車に適した道路への改修、もうひとつは鉄道の開通でした。

道路の改修は開通翌年の1890年に実施が決定し、甲武鉄道から一部補助金を得ています。その後、交通量が大幅に増加したためか、1899年には道幅の拡張願いが府中町長・国分寺村長の連名で東京府知事に出されました。ここには、工事費として両町村から2,000円を寄付することが記されていますが、実際は府中が全額負担するという密約書が国分寺との間に取り交わされています。拡張するメリットは国分寺側にはないので、当然といえば当然かもしれません。

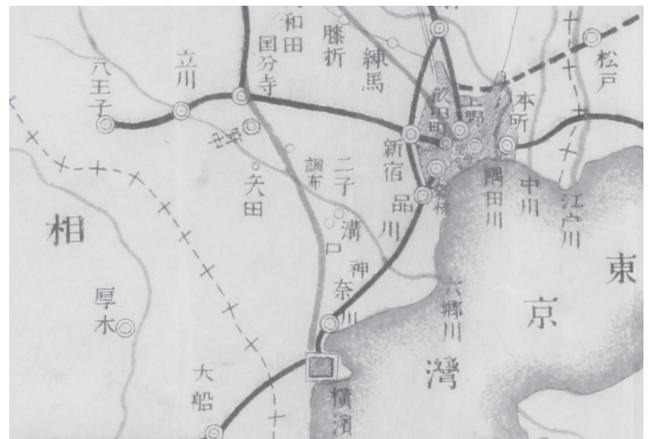
一方、鉄道の開通に関しては、いろいろアプローチを試みるものの上しく運びませんでした。1896年に南北中央鉄道が国分寺から府中を経由して横浜へ繋がる路線（右下図）を出願した際には、資本参加の動きがあったようですが、この鉄道は計画倒れとなりました。

「新規がダメなら延長を」ということか、1901年には国分寺・川越間に敷設された川越鉄道（現西武国分寺線・新宿線）に、府中への延長を働きかけています。地元では鉄道用地の確保に向けて動いていましたが、川越鉄道側が積極的ではなく

頓挫してしまいました。

府中に初めて鉄道が通ったのは、それから9年後のことです。線路のバラストやセメント等の材料となる多摩川の砂利を運搬するために、東京砂利鉄道（後の下河原線）が国分寺・下河原間に開通したのです。しかし残念ながら、この鉄道は砂利運搬専用でした。とはいえ、待ちわびた府中と国分寺を結ぶ鉄道です。将来的に貨物や旅客を輸送してもらおう内談があったのでしょうか、その開通において府中は経済的な協力を惜しみませんでした。鉄道用地の買収がスムーズに進むように、国分寺地内の地価を相場より高く設定し、超過分は府中が補助金として支出しています。反面、自らの町内は低い額に抑えたようで、国分寺の地価は府中の2～4倍にあたりました。このような支援のもと開通した東京砂利鉄道ですが、1914年（大正3）の多摩川出水により営業休止。その後、1920年に国有鉄道に買収され中央本線の支線となりますが、東京砂利鉄道として府中の人々の期待に応えることはありませんでした。

しかし、「捨てる神あれば拾う神あり」で、1916年、ついに府中と新宿を約1時間で結ぶ新たなみちが誕生しました。京王電車の開通です。以後、府中は東京近郊のまちとして新たな発展を始めますが、そこに至るまでの27年間には、こんな苦労があったのです。（花木知子）



南北中央鉄道の敷設出願図（部分）

近代プラネタリウム誕生 100 周年！

プラネタリウムについて知ろう！



③どこで見る？プラネタリウムの座席

近代プラネタリウム誕生 100 周年記念の連載も第 3 弾。今回はプラネタリウムの座席について取り上げます。

当館のプラネタリウムは、通常は先着順に座席が選べる「自由席」となっています。施設によっては指定席のところもあるようですが、いずれにせよ席を選ぶ段になって、「どの席が一番よく見えるのだろう」と迷ったことはありませんか。

一律にプラネタリウムといっても、座席のレイアウトは様々です。まず当館は座席の列にほぼ段差がなく平坦（右下の写真参照）ですが、野球のスタジアムのように階段状に傾斜しているという施設もあります。

傾斜のない水平ドームは、実際の星空観察と同様に頭上を見上げる体験ができます。当館もそうですが、背もたれを倒して楽に上を向ける座席を設置しているところが多いようです。水平ドームは、さらに 2 つのタイプがあり、当館のように扇形に一方方向を向いているタイプと、円の中心（投映機本体）に向かって丸く並んでいるタイプに分けられます。前者は観覧者が同じ方向を向いて座ることとなり、後者は座席によってそれぞれ違った方位を向くこととなります。

一方、歴史的には後発となる傾斜ドームは、映像番組などを正面方向に広くとらえることができ、楽な姿勢で見られるという利点があります。

近隣の施設でいうと、「多摩六都科学館」は傾斜型、「かわさき宙と緑の科学館」は水平で円形に並んだ座席レイアウトです。星の見え方にどんな違いがあるのか、見比べてみるのも面白いでしょう。

さて、ここでいよいよ、当館の一番良い席は

どこかお教えします！ …といたいところですが、実は違いはあれども「ここが一番良い」といえる座席は存在しません。それぞれの好みや目的に応じて席を選んでもらうこととなります。

まず、前寄りの席は、迫力の映像が見られます。映像番組などの見せ場は当然正面で展開しますので、大写して楽しむことができます。

一方、中心寄りの席は、ドーム全体を少ない歪みで見ることができます。真ん中の投映機に近いほどドームまでの距離が均等になり、再現されている星空も歪みが少なくなるのです。ただし、投映機が一部死角を作りますので、注目したい側の方位を確認して席を取りましょう（正面を南とすることが多いです）。

そして後ろ寄りの席は、全体を見渡すことに長けています。ドームに近すぎると歪みますが、広く見渡すには後ろ寄りがお勧めといえます。

同じプラネタリウムでも、座席によって楽しみ方は様々です。当館の座席は、列により背もたれの倒れる角度に違いがありますし、数は少ないですが、左右に少しだけ回転できる席などもあります。

次にプラネタリウムを見るときは、「どの席に座るか」にもこだわってみてくださいね。

（小林善紹）



当館の水平型の直径 23m ドーム。200 人以上を収容でき、客席は扇形に一方方向を向いている。